

Title	明末における奢安の乱と白蓮教
Sub Title	The relationship between the She-An Revolution and the Pai-lien-chiao sect at the end of the Ming dynasty
Author	浅井, 紀(Asai, Motoi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1976
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.47, No.3 (1976. 4) ,p.63(231)- 92(260)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19760400-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明末における奢安の乱と白蓮教

浅井紀

(目次)

- 一 はじめに
- 二 奢氏と安氏について
- 三 乱の顛末
- 四 明末四川省の白蓮教
- 五 援遼軍の派遣について
- 六 乱の指導層
- 七 亡命・生員等について
- 八 むすび

一 はじめに

明末の天啓元年（一六二一年）九月十七日に、四川省重慶で土司の永寧宣撫使奢崇明が乱を起し、次いで翌天啓二年二月に貴州の水西宣慰司の安邦彦がこれに呼応して立ち上がり、付近の土司で付和するもの多く、以後十数年にわたって苗族・猓族等の土司軍と明朝の官軍との間に戦いが繰り返されられた。これが所謂「奢安の乱」である。

天啓年間（一六二一年——一六二七年）に明朝の基盤を揺り動かし三大戦争が有った。一つは遼東に於けるヌルハチの後金軍との戦い、所謂「遼事」であり、一つは天啓二年五月に山東省で起った白蓮教徒徐鴻儒の乱であり、そしてあと一つが、四川・貴州・雲南の三省に跨って起った土司の大乱「奢安の乱」である。前の二つについては既に従来より研究がなされて来たが、奢安の乱については管見ではほとんどなされていない。ところがこの乱の持つ重要性は前二者に勝る

とも劣らないものがある。というのは、奢安の乱が「遼事」と密接な関係を持ち、かつ徐鴻儒の乱にも影響を与えていると考えられるからである。そこで本稿では奢安の乱の実体を解明し、併せて明末の政治社会状況を考察したい。

資料的に見れば、奢安の乱に関する記事はかなり豊富であり、明史紀事本末・卷六十九・平奢安にかなり詳しく乱の経過が述べられており、加えて、明夷録・両朝從信録・国権・地方志等にも多数見つけ出す事が出来る。しかし、この乱の実体を深く検討しようとする場合、これを詳細かつ正確に記録したものととして最も信頼に足る資料が有る。それが自ら乱の平定に当って功の有った四川巡撫朱燮元の著した「蜀事紀略」不分卷「乘城日録」不分卷「少師朱襄毅公督蜀疏草」十二卷（以後「督蜀疏草」と呼ぶ）の三つである。⁽¹⁾

朱燮元は浙江省山陰県人で、萬曆二十年の進士で、奢崇明が乱を起した時には四川左布政使であったが、成都防衛の功によって四川巡撫となった。その後も四川等の総督や兵部尚書の重職を歴任し、十数年にわたる奢安軍との戦いにおいて中心的役割を果している。⁽²⁾ その体験をエピソードごとにまとめて、年代順に配列したのが「蜀事紀略」であり、天啓元年十月から翌天啓二年一月にかけての百二日間に及ぶ奢崇明軍包囲下の成都籠城の様相を記録したのが「乘城日録」である。また、奢安の乱に関するものを中心とする百八十七件の上疏、塘報等を編集したのが「督蜀疏草」であり、いずれも奢安の乱に関する根本資料である。これ等三つの資料で特に重要なのは四川省に於ける白蓮教に関するものであり、これによって奢安の乱と白蓮教の関係が密接である事がわかる。朱燮元には別に「督黔疏草」なる著作も有ったが、現在は存在していないので、奢安の乱に関する検討は奢崇明の乱に重点が置かれる事を予め申し上げておく。

二 奢氏と安氏について

奢安の乱に入る前に、奢氏と安氏について簡単に述べたい。四川永寧宣撫使である奢氏は元來猓種であり、洪武年間

に阿奇という者が衆を率いて明朝に帰服し、宣撫使の職を授けられ、世々永寧（四川省叙永県）に住んで来た。万曆初年に、奢效忠に戦功が有り、明朝より優遇されて、諸土司中の雄となった。效忠の子奢從周に後嗣ぎが無かった為に、族人の奢崇明が立てられて宣撫使の職を継いだ。⁽³⁾

貴州省水西宣慰使安氏は洪武年間より代々水西（貴州省黔西県）に居して、苗民四十八族を統率して来た。安位に至り、まだ幼かったので、母奢社輝（奢崇明の妹）が後見人となったが、実権は安位の叔父の安邦彦が握っていた。⁽⁴⁾ 奢氏と安氏は長年にわたって通婚関係が有ったが、奢崇明の代に、土地争いをめぐって戦うなど不仲となっていた。しかし、後に奢安氏が連合して明朝に対抗した事が示しているように、その関係は深いものがあった。

三 乱の顛末

(1) 白蓮教徒の起事

奢安の乱そのものは苗族獠羅族を中心とする土司の反乱であるが、これと密接な関係を持つものとして白蓮教徒の存在が有る。明熹宗実録・卷九・天啓元年四月戊寅の条に

「四川綿州妖僧政坤等謀作乱。旋既就擒。道逆劉民選⁽⁵⁾竟逸去。民選羅江⁽⁶⁾學生員也。」

とあり、四川省綿州で政坤、劉民選が乱を起し、政坤は捕えられ、劉民選は逃亡したとの簡単な記事が有る。

これについて、朱燮元の著した「蜀事紀略」と「督蜀疏草」⁽⁷⁾によれば、更に詳しい事がわかる。即ち、天啓元年二月十五日に、白蓮教首である羅江県生員の劉明選⁽⁸⁾が自から「弥勒出世」と称して、政坤・洪彩・呉加成・方代等を中心とする四川省内各地の白蓮教徒六百余名を率いて、綿州石馬鎮で挙兵して綿州城を攻撃した。州城攻撃は事前に発覚した為に失敗し、政坤以下多数の教徒が捕えられたり斬られたりしたが、劉明選は逃亡し、永寧宣撫使奢崇明及びその子奢寅のもと

に身を投じ、その軍師となって明朝に対する反抗の機会を狙った。

(2) 援遼軍の派遣

丁度その時、四川とは遙か離れた遼東に於いて、ヌルハチに率いられた後金軍と明軍の戦いが激しく行われていた。即ち天啓元年二月には瀋陽が陥落し、三月には遼陽が陥ちた。この様な危機的状況に直面した明朝当局は遼東を救うべく、中国各地より多数の「援遼軍」を徴発した。この時に当り、奢崇明は上疏して、自から永寧宣撫司軍を率いて遼東の戦場に赴く事を願っている。⁽⁸⁾ 奢崇明の願いは許可され、これに加えて四川省内の他の土司軍も徴調され、合計三万の四川援遼軍が派遣される事となった。⁽⁸⁾ そこで(兵科給事中)明時挙を責任者とする調兵官が四川へ派遣されたが、⁽⁹⁾ その中に劉訓・何若海といった者がいて、彼等が途中で変心し、奢氏に投じて逆に明朝に対する反乱計画を立てた。⁽³⁾

(3) 重慶の変

いよいよ永寧宣撫司援遼軍が派遣される事となり、奢崇明の部下の樊竜・樊虎等が兵を率いて重慶に赴き、巡撫徐可求等の点検を受けた。ところが兵餉の不足からトラブルが発生し、遂に樊竜等は反旗をひるがえした。この事について、「明史紀事本末」巻六十九・平奢安には

「四川巡撫徐可求点核。汰其老弱發餉。餉復弗繼。竜等遂鼓衆反。」

とある。また「蜀事紀略」⁽³⁾には、樊竜の率いて来た永寧宣撫司軍が予定調兵数七千名を大幅に超えていたため、一名当り予定支給兵餉十七両を出せなくなり、兵員を再点検しようところ、これを怒った樊竜等が反乱を起したとある。樊竜等は巡撫徐可求をはじめ、知府・知県・総兵等の官員を殺して重慶を占領し、調兵官明時挙は負傷するも逃走して危うく難を免れた。重慶で反乱が起るや、奢崇明は直ちに軍を發して、遵義をはじめ、瀘州・合江・興文・納溪といった地方を攻略した。これには万曆年間播州で反乱を起した楊応竜の残党も加わっている。⁽¹⁰⁾

(4) 成都籠城

奢崇明は国号を「大梁」とし、年号を「瑞応」とし、中国の王朝に倣った官位を制定し、付近の各土司に檄を飛ばして反乱を促し、はつきりと明朝に対抗する姿勢を取った。そして、十月十八日には四川省の省都の成都に迫った。一方、四川省内各地の白蓮教徒も奢崇名の挙兵を見て一斉に蜂起してこれに合流している。一方成都では、巡按御史薛敷政・左布政使朱燮元・按察使林宰等が指導して守りを固め、城内で奢崇名の軍に内応しようとした白蓮教徒や調兵官で奢氏に寝返った劉訓等の動きを未然に抑えている。

奢軍は雲梯や旱船といった大規模な攻城兵器を繰り出して成都城を攻撃し、白蓮教首劉明選も教徒を率いて陣頭に立って戦っている。この間の事情については「乗城日録」に詳しいが、朱燮元は沈着な態度で籠城を指揮し、大礮を使うなどして奢軍の攻撃を退けている。一方、石砭宣撫使秦良玉を始めとする各地の援軍が続々と成都に至り、奢軍の將羅乾象が官軍側に投降する事などもあって、翌天啓二年一月三十日、実に百二日ぶりに成都の包囲は解け、奢崇明は退いた。

(5) 安邦彦立ち上る

四川に於ける戦いが漸く官軍側に有利に転換しようとしていた矢先、天啓二年二月七日に貴州水西宣慰司の安邦彦が奢崇明に呼応して乱を起した。水西土司は貴州省で最も大きく、これが立ち上がり、奢民安氏の対明朝連合戦線が出来たため、付近の苗族もこれに従って蜂起し、事態は一転して、四川・貴州・雲南の三省を巻き込む大乱へと発展した。安邦彦は二月九日に貴陽を包囲し、貴州巡撫王三善の率いる官軍と各地で激戦となった。一方四川に於いては、朱燮元は左布政使から巡撫に昇格し、総督張我統と共に官軍を指揮して反撃に転じ、奢崇名の將樊竜等の占拠する重慶を攻め、天啓二年五月二十七日遂にこれを回復した。その際、樊竜・張彤といった土司人の他に、何若海・熊長庚等の元調兵官、その他「亡命」「無頼」の漢人が多数斬獲されている。これについては、「督蜀疏草」・卷四・《復渝獻浮疏》に詳しい。

(6) 永寧の陥落

奢安の乱が一つのエポックを迎えたのは、天啓三年四月に四川の官兵が奢崇明の根拠地永寧を陥落させた時である。奢崇明・奢寅父子は逃れて水西の安邦彦のもとへ走り、白蓮教首劉明選は捕えられて「猷浮正法」の処分を受けている。この際の斬獲者については、「督蜀疏草」・卷九・「掃藺獻浮疏」に詳しい。永寧が陥ちた事により、以後主戦場は四川から貴州・雲南へと移り、水西安氏が反乱の中心となった。

(7) 以後の経過

これより、朱燮元等によって指揮された川雲貴三省の官兵と安邦彦・奢崇明を中心とする苗族・猓族等よりなる土司軍との間に長い戦いが続いた。この間、天啓四年一月に貴州巡撫王三善が戦死したり、天啓六年二月には奢寅が謀殺され、叛苗の一部が投降するなどしたが、戦いは一進一退を続けて勝敗は決し難かった。この経過については煩雑となるので詳しくは述べない。乱に一つの結末がついたのは、崇禎二年八月、奢崇明が「大梁王」、安邦彦が「四裔大長老」と称して、永寧を回復すべく進撃して来たのを官軍が反撃して、奢安両者が共に戦死した時である。天啓元年から十年目にして、反乱の首魁は斃れたが、土司の抵抗は依然として続き、完全にこれが終束したのは、水西宣慰使安位が死に苗族の大部が帰服した崇禎十年になってからである。朱燮元は永寧や水西の地を一部乱平定に功の有った漢人諸將に与えて「屯将」とし、残りは土司を置かず、各土目に与えて細分化して事を起すことが出来ないようにした。

以上、朱燮元の三著作と明史紀事本末・明実録・明史等によって奢安の乱を概括したが、本稿では主として永寧陥落までの奢崇明の乱に焦点を当て、その実体を究明していきたい。乱は、先ず「白蓮教徒の起事」が有り、それが奢崇明と結びつき、次いで「援遼軍の派遣」問題が起って遂に暴発する訳であるが、これらにからんで援遼軍徴調の差官である劉訓や何若海等の動きも有る。そこでこれ等の問題について各々その実体を見て行きたい。

四 明末四川省の白蓮教

元来四川省は白蓮教徒の活動の盛んな所であり、明代だけを見て、元末明初に明玉珍が「大夏国」を建て、皇帝を称した事を始めとし、以後しばしば彼等が乱を起した事は既に先学達⁽¹⁾によって指摘されている。この事は四川省が地理的に中国の西南に僻在している事、苗族を始めとする少数民族と漢民族が混在している複雑な人種構成等によって、明朝の支配がなかなか及び難い所にも起因しているであろう。

さてここでは、奢安の乱の引き金の役割を果たしたとも言うべき白蓮教徒の起事とその後の奢安軍への合流、及びその布教活動の実体等について検討していきたい。資料としては、「蜀事紀略」・「擒捕通省妖教略節」と「督蜀疏草」・卷一「請禁白蓮妖教疏」・卷九「擒治妖教疏」の三つ（以後、蜀事紀略・督蜀疏草の名を省く）、加えて「乘城日録」を主として用いる。

(1) 綿州石馬鎮の起事

天啓元年二月十五日の劉明選を頭目とする綿州起事の集団は、四川省竜安府白泥壩の呉加成という者の家に集って会を立て布教していた白蓮教徒達であった。劉明選の居る綿州羅江県が省都である成都に近い為に官憲に摘発され易い事を恐れて、比較的遠い竜安府に移って布教したわけである。綿州起事の模様について、「擒捕通省妖教略節」に拠れば、

「有羅江県生員劉明選。寄居蕭寺、忽掘地得印三顆、妖書一帙。遂因妄言、自称弥勒出世。糾夥大邑・平武・洪雅・榮經・遂寧・仁壽・南川妖賊吳加成・洪彩・方代・王国用・尹思忠・姜庇策・妖僧正坤等六百余名、于元年閏二月十五日、在綿州石馬鎮、張掛白攢絲偽傍。各造大紅円領・彩画竜虎・衣甲・雕馬刻符・并刀斧・旗幟・偽印・邪經等物料。衆千余、响喊大乱。」

とある。劉明選はもともと羅江県の生員であるが、自ら「弥勒出世」と称し起事したもので、その配下を見ると、その勢力

が四川省内の広い範囲に及んでいる事がわかる。この間の事情について更に「擒治妖教疏」を見ると

「至天啓元年閏二月内、密伝方代等、誘称劉明選の係活仏出世、俱要齋戒、各出香錢多寡不較、的於本月十四日齊至綿州、復觀活仏求免劫難等語、伝衆通知。劉明選又恐衆人不服称弥勒古仏出世、本月十五日寅時、動雷百般鼓衆。」

とあるように、「活動出世」とか「活仏求免劫難」といった言葉で人心を鼓舞し、「動雷」を合図に綿州城を攻撃する予定であった。次いで潼川府、綿州の安県、羅江県と攻略する計画であったから、最終目標は省都の成都であろうと思われる。当時白蓮教徒の唐学と遊民の李成という者が民間で

「弥勒古仏生于成都、名曰法王老祖。觀音下世投胎、名曰太娘⁽⁵⁾。」

という事を揚言していた事もこれを裏付ける。綿州石馬鎮で挙兵した白蓮教軍は綿州城攻撃へと向うのであるが、途中これを目撃した一僧侶の通報によって官側に知られ、州城で反撃を受けて結局起事は失敗した。その結果教徒側に多数の斬獲者を出したが、劉明選は逃走した。

起事失敗の原因は事前に察知された事にも在るが、教徒軍の武力の弱さも見逃す事は出来ない。「擒治妖教疏」に

「閱其器械、衣服、尚不逮街市演戲状。此豈直謀不軌者乎。」

とあるように、その武力はとても官側に対抗出来るものではなかった。起事軍の人数も六百余名と少いように、その目的はむしろ「弥勒出世」といったスローガンで一般の民衆を立ち上がらせる所に重点が有ったと言える。結局一般民衆が思うように動かなかつたのであるが、ここに白蓮教徒に欠けている強力な武力を持つ存在が有った。それが土司である。鈴木中正氏は宗教反乱が起る場合に、教徒の軍事的弱体を補う意味で民間の武力集団との提携協力が行われる例が多い事を指摘されている。⁽¹²⁾ 白蓮教徒の提携の相手として土司は絶好であろう。

(2) 白蓮教徒と奢崇明

劉選は綿州起事が失敗すると、永寧宣撫使奢崇明とその子奢寅のもとへ走り、その庇護を受けている。督蜀疏草・卷九「掃藺獻浮疏」に

「張尚義、即劉明選、係羅江縣學生員。以白蓮妖術煽惑三巴。偽号僭元、糾合万余衆、攻圍綿州、投酋父子、獻竜華國宝印一顆、授軍師。誘攻省城、登壇演法、官兵攻永、当陣生擒。三川素受其毒、万磔庶酬其辜。」

とあり劉明選は奢崇明父子に「竜華國宝印」一個を獻じて軍師の位を授けられ、成都攻撃を勧め、「登壇演法」して奢軍を鼓舞し、陣頭に立って戦ったが、遂に永寧陥落の際に生擒りにされたのである。これが示すように奢崇名の乱において劉明選の果たした役割は大きかったのである。

劉明選が綿州で起事するや、省内の白蓮教徒はこれに呼応して蠢動を始め、不穩な状勢が醸し出されて来るのであるが「擒捕通省妖教略節」に

「復出入各土司、煽誘反叛、占邑困省皆自此輩啓之」

とあるように、劉明選ばかりでなく他の白蓮教徒も土司に出入して明朝に対する反乱を煽ったのである。

元来、西南諸省の少数民族と白蓮教の結びつきは密接なものがあり、既に鈴木中正氏⁽¹³⁾や相田洋氏⁽¹⁴⁾等によって指摘されている。それによると、西南諸省の苗族を始めとする少数民族の間に白蓮教が浸透しており、しばしば白蓮教徒とこれ等の諸族が結びついて乱を起している。主なものを挙げれば、洪武三十年の漢中府沔縣の高福興の乱に陝蜀の番民が呼応して立ち上がったたり、成化十一年四月に明玉珍の子孫と称する湖南辰州府烏羅長官司の夷人石全州が「明王」と称して乱を起し、付近の苗族が多くこれに従った事が有る。又、正徳十年に雲南省烏蒙、芒部の彝人^ポ普法悪が漢語に通じ、「弥勒出世」を唱え、自から蛮王と称して起事した事も有る。明朝の直接支配の及ばない少数民族の土司は非合法宗教たる白蓮教にあって絶好の布教地であり、逃避場所であった。

白蓮教徒の起事によって惹起された四川省内の動揺が援遼軍派遣問題を切っ掛けとして暴発したのが重慶に於ける奢崇明の軍の反乱である。重慶で事が起るや、省内の白蓮教徒は一斉に各地で蜂起して具城を攻撃したり、奢軍に合流したりしている。洪雅県では宋宗吉・侯元・周伸といった者が具城を攻撃しようとして拏獲された。その他、南川県では白仙台、定遠県では周之成、仁寿県では梅大・梅五といった教徒が起事して鎮圧されているように、全省的に白蓮教徒の反乱が見られる。

奢崇明の軍が成都を包圍するに当り、劉明選は城内に多数の白蓮教徒を潜入させて、包圍軍に内応させ、城を陥落させる計画であったが事前に発覚して失敗している。「乗城日録」を見ると次のようである。

「壬辰（天啓元年十月二十五日）殺左道胡万明等、散其党。（中略）文選更名李応枢、徑投奢賊。仍遣腹心潛布以為内応。在省則有鄧翼聰、胡万明等。明招兵千余、密訂日月内応。自黃光輝搜獲密帖、有劉訓、何若海、胡万明等殊名。又有永寧妖僧覺昭、応天仮扮秦氏差人、往來万明家潛住。事露、召万明斬之。（中略）僧亦尋誅。」

これを見ると、劉訓、何若海は前に述べた通り、援遼軍調達の為に兵部より四川に派遣されて来た者達であるが、途中で変心して奢氏に投じ、劉明選の一党である胡万明や鄧翼聰と結んで成都内部で事を起そうとしたものである。これによって、奢崇明と白蓮教徒・亡命漢人の三者連合が出来ていた事がわかる。結局内応の企ては失敗し、劉訓・胡万明・鄧翼聰等は斬られるのであるが、劉明選に率いられた白蓮教徒は奢軍と協力して成都の包圍攻撃を行っている。奢軍は大規模な攻城兵器である「早船」を造り、劉明選はこれに乗って「登壇演法」して全軍を鼓舞している。「明史紀事本末」・卷六十九、平奢安に「一人披髮仗劍。上載羽旂」とあり、「石匱後集」「朱燮元」に、旗には「開基定鼎」と「安順剿逆」と書かれていたとあるが、これは劉明選の事を指しているのである。劉明選はこの後、天啓三年四月の永寧陥落の際に捕えられて処刑されるのであるが、この人物に代表されるように白蓮教徒は奢安の乱の重要な構成員となつてゐる。

(3) 組織と活動

四川省内に於いては、劉明選の一党の他にも多数の白蓮教徒が会を立て布教活動をしているが、ここでその主なものを、「蜀事紀略」の「擒捕通省妖教略節」と「督蜀疏草」の「請禁白蓮妖教疏」「擒治妖教疏」及び「乘城日録」によってまとめてみると次のようになる。

地名	人名	記事
南川県	白仙台	<p>順天閣を建て、拝燈集聚す。奢氏の乱を見て、旗を豎て、榜を立て、起事投合す。 順天王と号す。 (配下) 唐朝誦(宋大王と号す) 李聯方(明疆王と号す) 鄭応剛(虎利王と号す) 鮮啓(定疆王と号す) 秦運(左右護駕王と号す) 吳朝喜</p>
定遠県	周之成	<p>拝燈妖賊。妖書・讖文十五部を捕獲。</p>
眉州	鐘氏	<p>仏祖娑臨凡。「大娘」と号す。 每朔望日説法。 教徒の江万山・王正書等が「新善一律」を書く。</p>
合州	蔡嘉友 毛氏	<p>賢善天本来仏下界一百四十六転。 紫羅宮皇大聖王菩薩下界一百五十六転。</p>

広安州	鄧巽聰 妻甘氏	南斗巽宮下世と称す。 大娘と号す。 錢糧を上納させ、照水加職す。成都で奢軍に内応しようとして斬られる。
遂寧県	宋宗吉	白鶴錫燈を造り、錫盤に盛水して幻影を照し出す。燈党より各人三錢三分を上納させる。侯元・周伸等と洪雅県で起事し捕わる。
仁寿県	梅子然 侯元	拝燈于家。紙人紙馬を剪り、これを動かす。
嘉定州	杜奇諫 劉智	礼仏拝燈、約集三四千人 煽惑愚民、伝授妖書三卷
印州 大邑県	尹思忠 鄭延美	「弥勒仏在省」を称し、燈党を作って衆を惑わす。
竜安府	呉加成	劉明選を教主として立会伝教し、綿州で起事す。
達州	唐学	燈堂を立て、男婦数十を誘集し、焼香拝燈、夜聚晝散。
綿州	王時	劉明選の一党。弥勒仏、白蓮社、明尊教を妄称。綿州で起事。
遂寧県 安岳県 大足県 仁寿県	梅大 梅五	白蓮妖賊。糾衆して地方を劫掠。

(a) 「拝燈」と「燈党」

前掲の表に示されているように、各教徒に共通して見られる特徴は「拝燈」という行為であり、「燈党」の組織である。

「燈党」について、「乗城日録」天啓元年十月壬辰の条に

「辛酉春（天啓元年）有羅江県生員劉文選、自称弥勒出世、号法王、持練陰兵、煽惑愚俗。立燈党六万七千座。其徒燈頭千百成羣、反形大著・各州県申文告變。」（傍点筆者）

とあるように、劉明選は「法王」と号して、「燈党」を六万七千座立て、その教徒や燈頭が反乱を起したとある。更に広安州人鄧巽聰とその妻甘氏について「請禁白蓮妖教疏」に

「有広安人鄧巽聰。自称南斗異宮下世。其妻甘氏稱為三嬢与我密言。分立招立燈党六万七千座。每燈為一枝頭。約招數十人。俱皆法王弟子。凡投會者、俱於鄧処上納錢糧、待功成之日照銀加職。」

とあって、鄧は「南斗異宮下世」と称し、ここでも六万七千座の燈党が立てられ、每燈党に一枝頭があり、全て法王の弟子であるとす。また「擒捕通省妖教略節」にも

「各設燈党、每人按季出銀三錢三分、令燈頭彙送入省、大仏祖収貯」

とあって、燈党の組織が有り、燈頭が各人より毎季三錢三分を集めて、成都に居る「大仏祖」に送っているとす。この他の省内の白蓮教徒も全て「拝燈」を行い、「燈党」を立てている。「拝燈」という行為は如何なる教義に基いているか不明であり、各時代の白蓮教徒の宗教行為の中でも寡聞にしてこの種のもの⁽¹⁵⁾は知らない。嘉定州の教徒杜奇諫について「礼仏拝燈」とあるように、白蓮教徒は「弥勒仏」を信仰し、「拝燈」を行っているらしい。いづれにしろ「拝燈」の行為は「夜聚曉散」という白蓮教徒通例の行動の中でその神秘性を高めたであろう。

次に、六万七千座の燈党が立てられ、一座に燈頭又は技頭が置かれ、法王とか大仏祖と呼ばれる者がこれを統括したとある。六万七千座とは正確な数というよりも、教徒の非常に多い事を示すものであろう。劉明選は自から法王と称しているし、成都にも「大仏祖」と称す者がおり、両者がどの様な関係であるか判然としない。各燈党間の関係及び全ての燈党

を統括する教首なりが存在したかについても不明確である。教徒は各々独自の組織を持っているようでもあり、互いの連絡は密接でありながらも、全省的に統一された組織にはなっていないようにも見える。ただ法王弟子の燈党→燈頭→法王と続く縦系列の組織となっており、法王を中心とした家父長的組織になっていたとは言える。

(b) 「歛 錢」

「歛錢」即ち金銭を上納させる事は白蓮教徒が必ずといってよいほど行っている。鄧巽聰が教徒より納銀させて、事が成った時にその額に照して位を授ける約束をしている事は前掲の「請禁白蓮妖教疏」に見えるが、彼はこれによって「積貨無算」となっている。各燈党では每人毎季三錢三分を徴収して、燈頭がそれを集めて成都の「大仏祖」なる者に送っているとの事に示されているように、白蓮教主は上納の金銭で巨資を得ている。これなども徐鴻儒の乱と関係する灤州石仏莊の聞香教主王森が上納の金銭で巨万の富をなしたのと同様である。官憲側が白蓮教徒を非難する時の常套的表言である「歛錢惑衆」に示されるように、「歛錢」は布教活動につきものであった。

(c) 「業鏡」について

劉明選が奢氏のもとに投じて信頼を得るようになった経過について、「蜀事紀略」の「逆賊奢寅父子造叛殺占重慶略節」に拠ると

「又妖教首劉明選、改名李天枢、獻龍華国宝印一顆。中秋夜会飲。天枢用幻法、取水盆照面、独逆寅冠上生両翹牙、幢環列甚盛。」

とある。これは盆に水を盛って鏡とし、これに将来の富貴の幻影を照し出して見る者を幻惑する魔術である。宋宗吉についても「請禁白蓮妖教疏」に

「又用錫盆盛水、於燈下聚百十人為一堂、循序進拜。各於水盆中一照、或見冕旒袞袍、或見紗帽綵服。便知将来分位。」

於是感動衆人。」

とあるように、この方法によつて人心を引きつけている。鄧翼聰も教徒に対して「照水加職」、即ち水に映った幻影によつて位を与えており、四川省の教主はいづれもこの魔術を使っている。

野口鉄郎氏によれば、天啓二年五月に山東省で乱を起した白蓮教主徐鴻儒についても、

「以妖術惑衆。設水盆照人頭面、使各自見其為帝王將相衣冠、惑」⁽¹⁶⁾

とあるように、四川の白蓮教徒と同じ事をしている。竺沙雅章氏によると、古くから宗教反乱の指導者は仏教で所謂「業鏡」と呼ぶ鏡を使って人々を幻惑したとの事である。⁽¹⁷⁾「業鏡」は「これで人を照すと終身の貴賤寿夭がわかる」というもので、民衆は「業鏡」に映った富貴の姿になろうと進んで宗教指導者のもとに集つたとある。竺沙氏は「聊齋志異」の中に載っている、白蓮教主徐鴻儒が「業鏡」を使って民衆を引き寄せた記事に言及されているが、「水盆照面」の方法と「業鏡」が同じものである事は言うまでもないであろう。この幻術が白蓮教徒の間に広く行われていた事がわかる。

彼等が用いた幻術を更に挙げるならば、南川県で「妖民白仙台」を捕えた時に「豆兵一箱、木馬一百、五色紙人紙馬一箱」を押収しているように、⁽⁵⁾豆兵・木馬・紙人紙馬というものを動かす術が有る。「擒捕通省妖教略節」にも

「仁寿县、拏獲妖民梅子然、侯元等、拜燈于家。(中略)于無人处練鬼、剪成紙人紙馬、呼之行」

とあり、「紙人紙馬」を動かす幻術を行っていたとあるが、これも白蓮教徒に一般的に行われていたらしい。

(d) 「末劫」と「弥勒下世」

次に、白蓮教徒が起事した根本思想とも言うべき「弥勒下世」と「末劫思想」について述べたい。前述したように、劉明選が綿州で起事した際に、「弥勒下世」とか「活仏出世」とか、「活仏求免劫難」といった事を喧伝している。又白蓮教徒の間で「末劫之年、弥勒掌世」⁽⁵⁾や「弥勒仏在省」⁽⁶⁾といったスローガンが唱えられていた。これ等は末劫の世を弥勒仏が

下世して救うという一種のメシヤ思想に基いており、現世の危機を揚言し、宗教的權威による「世直し」を説いているのである。三期末劫思想に基き、過去、現在、未来を各々、燃燈仏、釈迦仏、弥勒仏が掌り、各期の末（末劫）には世界に終末状態が起るとされている⁽¹⁸⁾。末劫の世が来たならば、天変地異が相續いて起り、所謂「劫難」に人々は苦しむのであるが、それを救うのが弥勒仏であり、具体的には弥勒が下世した人物が現われるという形態をとっている。

劉明選が「活仏出世」を唱えたり、眉州の「妖婦鐘氏」が「仏祖婆臨凡」した「大娘」を称し、鄧翼聰が「南斗巽宮下世」を称し、その他の教徒も、「本来仏が下世転生した」と称しているのに見られる如く、神や仏が下世転生して、劫難に苦しむ民衆を救うという事を盛んに唱えているのである。官憲が捕獲した白蓮教徒の經典の中に「定劫経」三卷なるものが有り、中に「別立世界、改換乾坤」という語が見られるとあるが、⁽⁵⁾末劫に旧来の秩序が全て壊れ、弥勒が掌る新しい全く別の世界が出現するという事を言っているのである。これは現体制である明朝を根本的に否定する立場であるから、一種の宗教革命的思想であり、王朝権力にとって由々しい内容であろう。明末においては一般に、下元甲子、即ち天啓四年が末劫に当るとされて⁽¹⁸⁾おり、天啓元年の四川省白蓮教徒の乱も、翌天啓二年の山東省徐鴻儒の乱も、天啓四年に来たるべき末劫への危機意識をかき立て、弥勒下世による新世界の出現を喧伝して、民衆を引きつけたのではないかと推察される。

(e) 「白蓮教とマニ教」

明末四川に於ける白蓮教の系統を考える場合、マニ教との密接な関係を見落す事は出来ないと思う。綿州起事の際に劉明選に従っていた王時という者について次のようにある。これは「明律」卷十一礼一の条である。

「将王時間擬、妄称弥勒仏、白蓮社、明尊教、左道乱正煽惑人民為首律絞。」⁽⁷⁾（傍点筆者）

「明尊」とはマニ教の明暗二宗に基く「光明樂土の王」であり、「明尊教」がマニ教を指す事は言うまでも無い。ササン

朝ペルシャに起ったマニ教が中国に伝わり、「明教」とか「喫菜事魔」と呼ばれて中国人の間に広まっていた事は遍く知られている事実であるが、白蓮教と明教の関係については従来より二説有った。呉賡⁽¹⁹⁾や熊德基等⁽²⁰⁾の中国の学者、及び日本の小島晋治⁽²¹⁾、相田洋氏等⁽¹⁴⁾は白蓮教の形成過程に於いて、明教、即ちマニ教の影響が有る事を主張しているのに対し、和田清氏⁽²²⁾や鈴木中正氏⁽²³⁾はこれに対して否定的である。考えるに、歴史的に見て前掲の明律の規定にある三者は相互関連の有る一系統のものとして扱われているのではないか。四川の教徒が光明を尊崇する「拝燈」をしたり、「天明」と改号している事を考えれば、その教義の中にマニ教の影響が強いと言えるのではないか。

宮崎市定氏に拠れば、四川省は古くから長安と並んで西域文化の中国に流入する門戸に当り、西城の諸宗教も四川で栄えた例が多く、中でもマニ教は最も有力であるとされ、唐代より宋代に至る迄の四川のマニ教関係の記事を挙げておられる。⁽²⁴⁾これによっても四川省に於いて古くからマニに教の勢力が根強く存在していた事が判り、「夜衆曉散」という行為は本来マニ教系統の宗教のものである事を考えると、明末四川の白蓮教にマニ教の影響が大きい事も十分領かれる。

(f) 徐鴻儒の乱との関係

四川の白蓮教徒の起事について考える時、見落せないのは、それより一年後の天啓二年五月山東省で起った白蓮教徒徐鴻儒の乱である。既に野口鉄郎氏も挙げておられるように、⁽¹⁶⁾山東と四川の白蓮教徒の関係を示す資料が有る。「明通鑑」、天啓二年六月の条に

「徐鴻儒結四川妖賊、陷鄒嶧滕峽」

とあるし、明史紀事本末・卷七十一「平徐鴻儒」にも

「其時四川妖賊洪衆、劉応選⁽²⁵⁾、白仙台等助賊蜂起、巡撫朱燮元擒捕正法」

とあるように両者の関係を具体的ではないが示唆している。野口氏は「明史」⁽²⁵⁾趙彦伝が「徐鴻儒と共に乱を起した王

好賢の聞香教が、畿輔・山西・山東・河南・四川に蔓延し、教徒が一日百里を行く伝達手段を持っていた」との事を述べているのを引き、両者の間に確実ではないが何等等かの関係が有ったのではないかとされている。⁽¹⁶⁾

筆者の見た資料の中にも、当時の白蓮教徒の動きを示すものとして、「明熹宗実録」・卷二十八・天啓二年十一月戊午の条に

「御史練国事言。元兇雖擒、余党尚伏。近沛県林汝翥盤獲妖人李英等、帶有令旗一箱、上書妖言次第編号鈴盖妖印。拋供、教主見在大同居住。其党西通川蜀、北連醜虜、中拋汴梁。又先于鳳陽等処、暗集人馬、約期挙事。乃知天下之為徐鴻儒者尚多也。」

とある。これを見ても、徐鴻儒に連なる白蓮教徒の勢力の蔓延ぶりと各省に跨る連絡が有った事が判る。これは直接に四川と山東の關係を示すものではないが、状況証拠とはなるであろう。又、「明熹宗実録」・卷十八・天啓二年正月己未の条にも四川総督張我統の言で、

「総督川湖雲貴張我統言。近獲蘭賊黄国用供称。奢酋広覓奸細散赴河南、湖広等処密探。遵義、馬湖等兵流伝聴熒。恐有潜居京邸、造流言以弄機械者。乞勅五城并廠衛、緝事衙門、多方体訪。更望、皇上明諭大小臣工、凡蜀中事情悉以撫按奏報。為拋急思設法以措餉。勿聴法言。」

とあり、奢氏が多数のスパイを中国各地にばら散らして情報収集や流言を放っていた事を述べ、北京に於いても警戒態勢をとる事を願っている。奢氏のこのような広範囲にわたる情報収集網、連絡網を考えれば、白蓮教徒を含む奢安軍が四川や貴州で起事した事が山東の徐鴻儒に伝達されて、乱を誘発した可能性は高いと言えよう。

以上四川省内の白蓮教徒について述べて来たが、彼等の起した反乱の意義について考えてみたい。彼等の言う「末劫」における「弥勒下世」による現実世界の根本的転換は、一つの宗教的權威による他の一つの權威、即ち天命思想に基く王

朝権力の打倒である。しかし、その価値体系の根底は打倒すべき王朝権力ものと究極的には何等変らない。「業鏡」によって照し出される理想の姿が「王侯将相」であり、現実の王朝体制に似せて官職を作り、その燈党的組織は法王を頭とする家父長原理によって動かされている事に示されるように、その「革命原理」は易姓革命的次元に留まっている。ただ宗教的権威によって相対化された王朝権力及び現実の社会秩序は白蓮教徒の側から見れば何等服従すべきものでなく、現実の行動に於いては反乱の精神的支柱となり、起爆剤となり得るのである。奢安の乱に於いて白蓮教は反乱正統化の一つのイデオロギイを提供したものと考えられる。

五 援遼軍の派遣について

奢安の乱は奢氏援遼軍を率いた樊竜等が重慶で反旗を翻した事に始るが、この援遼軍派遣の事情を更に詳しく検討したい。

明朝当局は中国各地から援遼軍を調発するに当って、特に西南諸省の土司軍の戦闘力を高く評価していた。「籌遼碩画」卷三十に

「経略熊廷弼題。為酌調土兵以資征戰事。職惟、川將周世祿等所領川兵、心胆齊壯、器械精利、而營伍亦安整不乱、可謂歩兵之勁。周世祿等曰（中略）若以真正土官、領真正土兵、更有十倍于此者。」

とあって、遼東経略の熊廷弼の言として、四川の土司軍の強さを強調し、これを使うべしとしている。また、「明熹宗実録」・九卷・天啓元年四月戊寅の条にも、

「兵部類題言。近日渾河之戰、独川浙各兵奮殺賊至二千余人。」

とあり、渾河の戦いに見せた四川土兵の勇猛を評価している。土兵の戦闘力が実証されるや、土司軍の遼東への派遣は盛

んになるのであるが、この時に永寧宣撫使奢崇明は自から土司軍を率いて遼東へ赴く事を願って上疏している。「明熹宗実録」・卷九・天啓元年四月戊寅に

「四川永寧宣撫司宣撫奢崇明、上疏願調馬步精兵二万、直搗奴巢。」

とあり、「蜀事紀略」⁽³⁾及び「督蜀疏草」⁽²⁵⁾によれば、章守謂と楊衆という者を派遣して上疏し、適々京師に仮寓していた遵義県生員の何若海なる者がこれに協力し、遂に奢氏援遼軍派遣の運びとなった、とある。

「熹宗実録」の同じ天啓元年四月戊寅の条に、兵部の題言として、

「今遼事未寧、委庇分別調募庇援。況奢崇明等各具疏揭、自願報効、益宜鼓舞招用。」

とあり、奢崇明の願いを受入れ、他にも四川省内より、石砮と酉陽の土司軍、及び有志の兵を加え、合計三万を遼東へ派遣する事、兵餉は四川省内で加派調達する事となった。

そこで、調兵の責任者として兵科給事中の明時挙と御史の李達が任せられ、劉訓等の調兵官と共に四川省に赴き、六月中旬迄に兵を編成して北京に至る予定であった。ところが調兵官の中に、何若海・蔡金貴・廖鎮権・熊長庚のグループが有り、四川に至る途中で劉訓と謀って、明朝に対する反乱を企てるに至っている。劉訓は成都に行つて兵を集めて反乱の準備をし、熊長庚は重慶に行つて様子を窺い、何若海等三人は永寧の奢崇明のもとに投じて反乱を勧めている。⁽³⁾これ等の者は奢氏反乱のきっかけを作り、その後も奢軍の中にあつて指導的な役割を演じている。

果して、いよいよ援遼軍派遣の段になつて奢崇明の態度は変化している。即ち、明史、列伝・第二百・四川土司三に

「崇明与子寅久蓄異志、借調兵援遼、遣其壻樊竜、部党張彤等、領兵至重慶、久駐不発。巡撫徐可求移鎮重慶、趣永寧兵。」

とあつて、重慶に居坐つて発せず、予定の期限に遅れた為に、巡撫の督促を受けている。朱燮元は蜀事紀略⁽³⁾の中で「及天

啓辛酉、檄調適中其謀。日夜借此造軍器。而行則獨後。愈催愈緩。待各路援兵殫尽。然後、使心腹童輩領兵而出。」と述べて、奢崇明の行動を、援遼に借りて軍器を造るなどの反乱の準備をし、四川省内の援遼軍が続々と出發して省内が空になった後ようやく兵を出發させた、として、計画的な反乱であるとしている。最初自から援遼派遣を願いながら、後になってこれを嫌う態度を見せているのは矛盾しており、この間の事情については今一つははっきりしない。最初から全ての反乱の為の計画的行動であったのか、途中から変心したのかのどちらかであろう。この点を更に考えていくと、奢崇明が援遼派遣を志願した事について、単なる武功を上げる為とはとれない所がある。と言うのは、援遼軍に派遣されるといふ事は非常な犠牲が伴ったからである。その好例として、遼東での戦いで拔群の戦功を上げた四川の石砮宣撫司軍がある。「明熹宗実録」・卷十二・天啓元年七月庚子の条に、

「四川石砮宣撫司、加銜守備秦拱明奏。父邦明奉命援遼、尽鬻家産、以為軍資。瀋陽之役。先登殺賊。父既齏粉、而三口妻孥滯京華、行乞求助。乞給償所費金、以贖産業。其重慶衛所与臣接壤絶軍屯地尽没豪右。乞查馭撥二三十頃、以贍孤寒。更念同父陣亡部落徙重給卹。」

とあって、石砮宣撫司軍が天啓元年三月の瀋陽をめぐる戦いにおいて勇戦奮闘しながらも大損害を出し、明朝当局の手当てが無い為に財産を鬻り尽した窮状を述べて、援助を請願している。同じ「明熹宗実録」・卷十三・天啓元年八月乙酉の条に石砮宣撫司の女将として名高い秦良玉が上疏して

「臣兄弟邦屏、明屏統兵援遼。渾河之戰邦屏先登殺賊、為国捐軀、族兵数百、部百千余同時戰歿。悽慘天愁。乞從優叙録兄子大賚。(中略)臣自征播以来所建之功不滿所妬之口貝錦含沙。故怨未消、新忠難樹。更乞天恩燭照」

と述べて、秦氏の援遼軍が多大の犠牲を払ったにも拘らず、その見返りの少い事に不満を述べている。遼東経略熊廷弼もその題奏⁽²⁶⁾の中で土司軍の派遣について「西南の極より東北の遠地へ赴くため、言語・飲食・宿舍等々途中の困難が多いの

で、特に注意して優遇すべきである」旨を述べているように、援遼軍の派遣は土司にとってまことに大きな負担であった。

朝鮮の「仁祖実録」・卷五・天啓四年四月甲辰の条に、秦請副使尹暄の言として

「中原亦有变故。徵兵於黔中。黔中人作毋向遼東浪死歌、遂起兵作乱。衆至十余万、王軍門（王三善）為此賊所擒。朝延特發四省兵擊之云」⁽²⁷⁾

とあり、これは貴州の安邦彦の乱を指しており、貴州のものが遼東に派遣される事を「浪死」として忌避して乱を起した事が朝鮮の使節にまで知られている事がわかる。この様に犠牲の多い援遼軍に奢崇明が志願したのは、朱燮元の言うように、これに借りて武器を調達する等の反乱の準備をしていた可能性が強いと言えよう。これに加えて、白蓮教主劉明選と劉訓・何若海・蔡金貴等の調兵官グループが奢崇明のもとへ投じた事によって、反乱計画が強化され加速されたのではないかと推察される。また、「蜀事紀略」の「逆賊奢寅父子造叛殺占重慶略節」に

「崇明遜謝。然其逆性実天成。子寅更兇獍、勇絶人。凡遇五方不逞之徒、孜孜延納、解衣推食、絶不少吝、遂為捕逃藪。宣淫屠殺不可枚舉。事發皆藉主文代為飭弁、得以不究。」

とあるように、奢崇明父子は日頃から、「亡命」「無頼」の徒を受入れて養っており、永寧はこれ等の者達の巢になっていたとあることから、奢氏の明朝に対する反抗が長年にわたって積み上げられて来たものである事がわかる。

奢崇明が乱を起した事について、援遼軍徴調の責任者である兵科給事中明時挙や四川巡撫徐可求等の不手際を責める意見も有った。「三朝遼事実録」・卷六・に

「(天啓元年)十二月四日、四川乱奏至。先是、科臣明時舉捧檄起土司兵、誅索無厭。永寧酋長奢崇明令土目將兵一万詣重慶、聽撫臣徐可求点閱。可求置不即点視、漫云数少。土兵伺候月余、洶洶思乱。而可求杖其頭目各五板。欲尽黥土

兵之面以別記驗。于是統領人樊奄樊虎一呼、即起乱殺官民。」

とあるように、乱の原因を明時挙と徐可求の横暴と怠慢に帰し、士兵に黥いれずみをしようとした事を乱の発端としているのがその例である。これに対して朱燮元は、督蜀疏草・卷三「会勘催兵科道疏」に於いて、明時挙等の不手際は認めながらも、重慶の起乱直後に四方に「大梁国」を号する告示が張り出されたり、数日ならずして遵義や永寧で奢軍が行動を起しているのに見られるように、乱の根本原因は奢崇明の長年にわたる陰謀であり、士兵に黥をしようとしたとの話しは全くの捏造であると反駁している。しかし、四川援遼軍三万名で、一名当り十七両の支給として合計五十一万両の軍餉を省内で加派調達しようとした所に無理が有り、人心に動揺を与えて乱を招く隙を作ったと批判している。「督蜀疏草」・卷一「請発帑金疏」を見ても、この五十一万両の調達のために如何に省内の民が苦心しているかについて述べており、この軍餉の重い負担が省内を不安定にしていた事も見逃せない。

当時の状況を表わすものとして、「明熹実録」・卷二十三・天啓二年六月乙亥の条に大学士兵部尚書孫承宗が

「臣独言各边蓋自逆奴發難以來到处徵調、營伍為空。(中略)成都已解困、而奢酋躑躅未已。滇黔被因而内外声息不通。白蓮播手一招而州县嚮心。其故皆起于遼事決裂。徵兵徵餉、使海内喪其樂生之心。而群為走險之計。則臣始終不能無厚望于辺臣也。」

と述べている。即ち、遼事の勃発によって中国各地の軍事力が動員されて国内治安力が脆弱となった所に加え、遼事による軍餉の負担が重く掛り、これにつれて白蓮教を始めとする民衆の反乱が激化して来た事を示す好例であろう。当時の明朝の当局者は一様に「遼事」の結果としての四川と山東の乱と考えていた。「明熹宗実録」・卷六十二・天啓五年八月辛丑の条に、聖諭として

「念、自逆奴内犯、遼左戒嚴。(中略)而徵兵西蜀、則西蜀變。風聞山東、則山東乱」

とあるのに示されるように、遼事の結果として奢安の乱が起り、それが山東に伝わって白蓮教主徐鴻儒の乱を誘発したと見做しているのである。要するに「遼事」は明末に於ける一連の反乱を引き起こす一大原因であった。

六 乱の指導層

奢安の乱は土司の反乱であるから、その主力軍が苗族や猯羅族等の土司人である事は言うまでもないが、白蓮教徒や亡命漢人がこれに合流している事は既に述べた。そこで改めてここで奢安軍の指導層がどの様な分子によって構成されているか述べたい。「督蜀疏草」・卷四「復渝獻浮疏」は天啓二年五月に官軍が重慶を回復した際の斬獲者を載せ、同書・卷九「掃藺獻浮疏」は天啓二年九月より天啓四年二月迄の斬獲者を載せており、これに拠って主として奢崇明の軍の指導層の概要が得られる。それ等を分類すると次の様になる。

奢氏一族	3名	白蓮教主	1名
永寧司人	23名	(劉明選)	
水西司人	2名		
生員	12名		
軍人軍籍	6名		
亡命、無頼	20名		
その他			
		合計	67名

土司人の中にも生員がおり、亡命の中にも軍人がいるように、この表の数字は正確とは言えないが、これを見れば奢崇明の軍の指導層の構成はわかる。即ち、土司人の他に、郷村の指導層である生員、軍人軍籍、白蓮教主、亡命、無頼等

の者達が多数幹部となっている。これによって、奢安の乱が単なる土司の反乱というばかりでなく、種々の要素を含んだ複雑な性格を持っている事があらためてわかる。そこで、これ等の亡命、生員等について検討を加えたい。

七 亡命、生員等について

奢安の乱に於いて白蓮教徒と並んで大きな役割を果したのが、亡命無頼の漢人であり、在地の不平生員であった。これ等の者達についてその実体を究めたい。

崇明が重慶で反乱を起すに当って、援遼軍徴調の兵部出差となつて四川に来た何若海・蔡金貴・廖鎮権・劉訓・そして熊長庚といった者達が奢氏に投じて反乱の計画を勧め、その後も奢軍の中で指導的役割を果した事については前に述べた。この中の何若海という人物については、「督蜀疏草」・卷四「復渝獻浮疏」に

「何若海。年四十五歳。遵義県学廩膳生員。先年潜入北京、以売篆刻為生。曾蒙吏部咨送兵部、授守備職銜、用之不聽。雄心落魄。後見東事孔亟、屢赴衙門条陳、未蒙見採。適會差楊衆等、報兵援遼、不許。若海受銀七十兩、為具本。称、秦氏女流尚能報效。豈鬚眉大夫反不如之。因許援遼。又為奢會差役、借費千余金、遂乘催調之差、前往永寧、投奢寅父子、条三策、謀凶大事、逆賊從下策。(中略) 拜若海為相。凡密謀狡計、悉其運籌。」

とある。これによれば、もともと何若海は大望を抱いて北京へ行き、仕官の道を求めたが得られない不平生員であった。遼事が起るや、奢崇明の援遼軍派遣の上疏に協力して親密な関係となり、兵部の出差となつて援遼軍徴調の任を帯びて四川に行くのであるが、途中で変心し、奢氏に投じて明朝に対する反乱を行うのである。何若海の行動範囲の広い事に注目すべきであり、北京に居て明朝末期の内憂外患を見聞し、明朝恐るに足らずとして、次第にこれを打倒する事を考えるようになったのではないかと推察される。奢崇明の配下の武將張彤も北京や宣府、遼陽等の所を巡り、

「中国雖大、顧兵脆弱、易与耳。舉大事無難。」⁽²⁸⁾

と言っているが、遼東に於ける明軍の若戦を見てこれを侮る気持となったようである。

又、何若海と共に兵部出差となつて奢氏に投じた蔡金貴については「掃藺獻浮疏」に

「蔡金貴、係仁懷隰人。播平、授冠帶把總。見酋叛乱、指称本隰原是苗地、投獻与酋。」

とあり、播州の楊応竜の乱の平定に参加して把總を授けられた軍人である。同様に兵部出差となり、何若海等と謀つて成都に入つて兵を集め、後日の内応の準備をして、後発覚して斬られた劉訓は北方人である。更に、熊長庚なる人物については、「督蜀疏草」・卷四「復渝獻浮疏」に

「熊長庚。年五十歳。江西端安人。以援遼同何若海等入川調兵。為奢寅預謀。於上年八月内、先到重慶府、黃葛渡觀音堂、窺深地利。帖拜府隰、自称太祖七世後。楚藩朱叔鰲頓首。巴隰快手黃民春送帖認的。及九月既反、長庚授偽給督府銜。(中略)衆目共睹矧其假称王孫。」

とあり、これなども、劉訓と同様に亡命漢人が辺境に走つて事を起す例であろう。以上の奢崇明の乱に重要な役割を果した漢人亡命者の行動に見られる如く、援遼を中心とする明帝国全体の状況と奢安の乱の密接な結びつきが判るであろう。

何若海は自から「星宿」⁽²⁹⁾を称しており、熊長庚が「太祖七世の子孫」を称し、奢軍が「二十八宿の旗」を持っていた事加えるに、奢崇明が援遼軍派遣の請願の使者として使つた浙江省会稽隰人である章守謂なるものについて

「素曉天文地理、刻篆偽璽、暗埋賊墓。妖言有天子氣、愆憑謀反。日与奢寅随營主謀、与何若海竝称相国」⁽³⁰⁾

とある事によつて、奢軍に白蓮教又は何等かの迷信的觀念の影響が強い事を窺わせる。これは白蓮教と奢氏の密接な関係からも来ているのであろう。

亡命漢人はその他に、他省より四川に商売に来て奢軍に投じた者も多い。例えば、江西省人孔聞過について、同じく

「掃蘭獻浮疏」に

「孔聞過、即孔文谷、係江西撫州府臨川縣人。慣在永寧貿易、付賊謀逆、授偽兵科給事中。每作書啓、通各苗借兵。時進密計、為賊心腹。」

とあって、辺境に客商が入り込み事を起す例を示している。この他にも、四川に材木の買付けに来て、重慶に住んでいた浙江人王元臣が樊竜の軍に投じた例、重慶に客寓して青布を売っていた南直隸上元縣人董三策が樊竜の股肱となった例、重慶で書買をしていた江西省南昌人傅楫年が同じく樊竜のもとで把総となった例等が見られる。⁽³¹⁾

又、獄に繋がれていた江津縣生員の李遠達という者が脱走して奢氏に投じて、「経略」の地位を得た例、同じく獄囚であった湖広興國人の周邦大が反乱軍に降り、成都攻撃にも参加して「総兵」の位を得た例等々、⁽³¹⁾奢氏の元には明朝に敵対的な分子が続々と投入している。

郷村の実力者である生員が奢崇明の軍の中に多数入り込んでいた事は既に述べたが、劉明選や何若海等も生員出身であり、これ等も入れれば生員の数は更に多くなる。在地の生員が奢軍に加わった主な例として、周鼎、丁汝登、について述べたい。周鼎については「復渝獻浮疏」に

「周鼎。年三十四歳。永寧廩膳生員。頗有機智。辺境中翹楚也。因科挙不得志、遂蓄異謀。天啓元年、調蘭苗兵援遼、鼎即棄儒、同往重慶府。樊竜発難、鼎与謀、授偽重慶府知府」

とあり、科挙に志を得ず、不平を抱いて奢氏に投じ、重慶府知府の位を授けられている。丁汝登については、「復渝獻浮疏」に

「丁汝登。年五十歳。永寧衛生員。初工挙子。業既不得志、輒鬱鬱感慨。因周鼎為介紹而見之於奢寅。寅亦優礼遇之。後鼎与樊竜自重慶発難、寅遂授以偽守備職銜。」

とあり、これも周鼎と同じ不平生員であり、周鼎の紹介で奢寅に近づき、守備の位を得ている。この他にも多数の生員が奢氏に投じており枚挙に暇が無い程である。また直接奢崇明の乱には参加しなかったが、暗にこれを煽動し助けたのではないかとして朱燮元によって厳しく糾弾された劉時俊⁽³²⁾という郷紳も有った。このように在地の生員で奢軍に加わったり、暗にこれを支持する動きを見せる者がかなり存在したいという事は、明朝の支配力の低下を物語るものであり、特に「遼事」が起って、「遼餉」の負担が重くなるとこの傾向が一層強められたものと考えられる。

八 「むすび」

以上奢安の乱の実体を解明して来たが、問題が多岐にわたって掘り下げが不足している嫌いはあるも、乱が種々の要素を含んだ非常に幅広い性格のものである事は御理解頂けた事と思う。この乱が西南の辺境の地で起りながらも、単なる叛服常なき土司の反乱でなく、その実体は正に当時の明帝国の政治社会状況の集中的表現であったと言える。この乱の構成要素は、遼事を切っ掛けとして、明朝権力と土司の対抗関係が激化された事、明朝権力に対する亡命や生員等の不平漢人の反抗、そして全体を統括するイデオロギイとしての白蓮教の存在である。これは辺境地域に於ける反乱の一つの典型を示すものであろう。同時に全中国的な状況とも密接に結びついている事は、遼事や徐鴻儒との関係に於いて既に指摘した通りである。この時期に於ける白蓮教徒の蠢動を始めとする明帝国全体を包む「造反」の趨勢は互いに影響し合いながら発展し明朝を滅亡へと導くのである。白蓮教徒の活動、援遼軍の派遣等の問題については稿を更めて検討したい。

(一九七五年十一月七日稿了)

註

(1) 「蜀事紀略」と「乘城日録」は「朱襄毅公平蜀始末」という題で、「督蜀疏草」と共に二帙に収められており、初版は天啓年間であるが、筆者が用いた東洋文庫蔵の版は康熙五十九年に朱燮元の子孫が重刊したものである。

(2) 明史・列伝第一百三十七・朱燮元

(3) 蜀事紀略・「逆賊奢寅父子造叛殺占重慶略節」

(4) 明史・列伝第二百四・貴州土司

(5) 蜀事紀略・「擒捕通省妖教略節」

(6) 督蜀疏草・卷一頁26「請禁白蓮妖教疏」

(7) 督蜀疏草・卷九「擒治妖教疏」

(8) 明熹宗実録・卷九・天啓元年四月戊寅

(9) 三朝遼事実録・卷四

(10) 三朝遼事実録・卷六

(11) 鈴木中正「中国史における革命と宗教」第六章・明の白蓮教反乱

李守孔「明代白蓮教考略」(明代宗教)

(12) 鈴木中正・前掲書・第七章・天啓二年の白蓮教乱

(13) 鈴木中正・前掲書・第六章

(14) 相田洋「白蓮教の成立とその展開」(中国民衆反乱の世界)

(15) 「光明」を尊ぶマニ教の影響かとも考えられる。

(16) 野口鉄郎「天啓徐鴻儒の乱」(上)(下)(東方宗教二〇・

明末における奢安の乱と白蓮教

二二)

(17) 笠沙雅章「方臘の乱と喫菜事魔」東洋史研究三二―四(一七七四)

(18) 沢田瑞穂「竜華経の研究」(校注・破邪詳弁附編)

相田洋・前掲論文

(19) 呉晗「明教与大明帝国」(読史劄記)

(20) 熊德基「中国農民戦争与宗教及相関問題」(歴史論叢一)

(21) 小島晋治「農民戦争における宗教」(中国文化叢書・6・宗教)

(22) 和田清「明の太祖と紅巾の賊」(東洋学報一三一―二)

(23) 鈴木中正・前掲書・第五章・頁74

(24) 宮崎市定「宋代における殺人祭鬼の習俗について」中国学

誌・第七本

(25) 督蜀疏草・卷四「復渝猷浮疏」

(26) 籌遠碩画・卷三十

(27) この記事は、李光濤著「明季流寇始末」頁8(白蓮教)の指摘による。

(28) 督蜀疏草・卷四「復渝猷浮疏」

(29) 督蜀疏草・卷三「報擒獲巨惡疏」

(30) 督蜀疏草・卷九「掃蕩猷浮疏」

(31) 督蜀疏草・卷九「掃蕩猷浮疏」

(32) 督蜀疏草・卷二「糾參鄉紳構苗疏」

(奢安の乱関係図)

